日本台湾学会
ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 45 号

<目次>

巻頭言 ･･･1
特集 第 25 学術大会を振り返って ･･･2
受賞のことば ･･･20
学会参加記
　第 20 回欧州台湾学会（EATS） ･･･22
学会活動報告 ･･･25

巻　頭　言

第 13 期理事就任にあたって

日本台湾学会理事長　北波道子

このたび、日本台湾学会第 13 期理事長に就任いたしました。1998 年に、東京大学で行われた創立大会で会場の後ろの方の席に座っていた私は、まだ大学院の博士課程に進学したばかりでした。当然、25 年後の今日を想像することすらできませんでした。今、四半世紀にわたって、日本における台湾研究の牽引役となってきた本会の活動を振り返り、懐かしく、かつ誇らしく思うと同時に、これまで諸先輩方のご尽力と、会員の皆様の努力と熱意によって守り育てられてきた日本台湾学会を引き継いでいくという役目の重みをひしひしと感じております。

理事長就任にあたり、私が一番大切にしたいことは、このように発展し、継続されてきた本会を、大切に、次の世代の皆さんに繋いでいくための精一杯の努力です。その内容として、まず、維持すべきと考えるのは、学会としての基本的な機能です。具体的には、活発で自由な議論が展開される学術大会の開催、質の高い最新の研究が集約された学会誌の発行です。また、これらを支えるものとして、会員間の情報交換の機能を果たすニュースレター、各地で開かれる定例研究会、情報の発信と共有のツールとしてのホームページ、そしてメールサービス等です。これらの活動と成果が、この 25 年間継続され、蓄積されて、本会を形づくってきました。学術研究のプラットフォームとして、各分野における専門的、あるいは先進的な議論が深めら

れる場であり、かつ学際的な研究の発表と議論ができる場であること、これは地域研究という学問分野の特徴です。学術団体として日本台湾学会がこうした活動における活力とクオリティを維持し続けてきたこと、そしてこれからも続けていくということの背後には、各分野の専門家たる会員それぞれの研鑽とご協力が不可欠であり、私一人の力では何一つ及ぶところがないことを改めて実感します。こうしたことから理事長としての自身の役割とは、引き続きのご協力をお願いし、また、感謝をお示しすることではないかと考えるにいたりました。というわけで、この場を借りて、「コロナ禍明け」第１回目となる本年度、名古屋市立大学での第 25 回学術大会が無事、盛況のうちに開催されましたことを、実行委員会をはじめ関係者の皆様、ご登壇の皆様、および全てのご参加の皆様に御礼申し上げたいと思います。

さて、日本台湾学会は、その専門家間の連携を活用して、ソーシャル・アウトリーチを強めてまいりました。例えば、「台湾修学旅行支援研究者ネットワーク（SNET 台湾）」の講師には、日本台湾学会の会員も数多く、私たちは研究者がその専門知を以て社会に働きかける枠組みを持つことや、その活動との連携を大切に考えています。また、本会は、それぞれの会員の研究活動に関して、広く学術関係者以外の人々に対しても情報を提供し、信頼できるプラットフォームとしての機能を果たすためにも、活動しています。例えば、２年に一度の台湾学会賞に加えて、2023 年に始まった学術賞と特別賞は、日本における台湾研究の水準を世に知らしめる役割を担っていると考えられます。また、グローバルなつながりとしては、日本台湾学会のホームページのリンクから、北米台湾研究学会（NATSA）と欧州台湾研究協会（EATS）へ飛び、つながることができます。加えて、対外発信強化プロジェクトを推進し、学会として国際的な台湾研究の学術大会や国際的な台湾研究学術誌 *International Journal of Taiwan Studies* への参加も実現してきました。

このように、日本台湾学会は日々成長を続けてまいりました。四半世紀というと長く感じる一面もありますが、人間の年齢でいえば、25 歳はこれから社会に出て活躍していく年齢ともいえます。日本台湾学会がこれからも発展を続け、新しい世代に台湾研究の意義を伝えていけるよう、微力を尽くしてまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

特　集
第 25 回学術大会を振り返って

第 25 回学術大会を振り返って

実行委員長　やまだあつし（名古屋市立大学）

今回の学術大会は、前回の第 24 回大会（法政大学市ヶ谷キャンパス）に引き続き、ハイフレックス方式で行いました。久しぶりの東京以外での大会なので何名の方に参加いただけるかという心配があり、他にも心配事は多々ありましたが、盛況におわりました。これは参加いただいた皆様の賜物であり、実行委員会の先生方、学生たちの協力の賜物です。あらためてお礼申し上げます。

開催校を引き受けるにあたり、オンラインだけで学術大会をできる時代において、東京圏でも関西圏でもない場所で大会を行うこと、それも設備が不十分な公立大学で大会を行うこと、の意義は何かを考えました。その結論は（１）名古屋ならではということをしたい、（２）設

備に恵まれない大学でもできるということを見せたい、という2つのこだわりです。そのこだわりの顕れたものを列挙すれば、シンポジウム、ハイフレックス方式、台湾風弁当、となります。シンポジウムについては別稿がありますので、ここではハイフレックス方式と台湾風弁当について紹介します。

大会の開催方法については、会場校の設備が不十分であるにもかかわらず、ハイフレックス方式にこだわりました。今年度に入り、オンラインを止めて対面だけで学術大会を行う学会が増えています。対面には多々利点があり運営も楽ですが、日本台湾学会は国際学会です。特に名古屋は、台湾と結ぶ飛行機がコロナ前のようには飛んでいないこともあり、ハイフレックス方式で広く参加を求めることとしました。とはいえ、同時通訳入りのハイフレックス方式は、第24回大会での状況から我々の予算では難しいと判断し、同時通訳なしで行いました。会場校の教室に有線LANはなく、Wi-Fiはあるものの信頼度が低いので使用せず、全てモバイルWi-Fiを使用しました。既存のネット環境が使えない、言い換えると設備が不十分な場所でも、ハイフレックス方式は可能ということです。事前に設備の問題点を把握し、無理なく行ったので、分科会でPC1台が不調になって予備に切り替えた以外は、特段のトラブルなく行えました。

台湾風弁当ですが、どのように昼食を提供するか悩んだ末の解決法です。開催校の周囲で日曜に開く食堂は多くありません。大学生協の食堂になると、日本台湾学会程度の動員規模では採算にあいません。外部業者の弁当を用意することになります。名古屋で弁当だと、味噌カツ・きしめんなど「名古屋めし」でしょうが、それは名古屋駅でも食することができます。「台湾ラーメン」は汁物ですし辛いので多数への提供には向きません。それで、名古屋のイベントに出店していたアミ族の経営する食堂の弁当がおいしかったことを思い出し、依頼することにしました。幸い、好評だったようです。

第25回学術大会は盛況ではありましたが、公立大学、それも病院を中心とする大学であるため、できなかったことが２点ありました。１つは書店の出店です。今まで大学生協以外の書店出店を認めておらず、他の学会でも断ってきたというのが大学側の言い分です。以前に講演会を大学で開催した際、大学生協の販売という形で講演者の本を売ったことがあったので、今回も便法を考えましたが、難しいとして見送りました。もう１つは懇親会です。伝染病医療の最前線に立つ病院を中心とする大学として、コロナが開催申請時は第２類であり、開催１か月を切ってから第５類になったという状況で、懇親会を開くのは困難でした。これらは次に開く際は、なんとかしようと考えています。

＜第25回学術大会公開シンポジウム＞

モノづくり愛知と台湾

やまだあつし（名古屋市立大学）

企画責任者・趣旨説明者・司会：やまだあつし（名古屋市立大学）
報告者：蔡龍保（国立台北大学）・謝斐宇（中央研究院）・大石恵（高崎経済大学）
コメンテータ：佐藤幸人（アジア経済研究所）・洪紹洋（国立陽明交通大学）オンライン参加

第25回学術大会の公開シンポジウムは、多くの学会員・市民に参加いただき、盛況なものとなりました。参加いただいた学会員・市民の皆様、貴重な報告やコメントいただいた先生方、開催準備・当日の運営に協力いただいた先生方・学生の皆さんにお礼申し上げます。

このシンポジウム開催にあたり考えたことは、愛知・名古屋にて、対面で開催する意義です。オンライン技術の進歩により、議論の場は研究者、市民ともに多様化し、ネットは玉石混交の議論で溢れていますが、海外の優れた研究者から対面で話を聞く機会は少ないはずです。とはいえ、東京でなく名古屋で開く以上、愛知・名古屋らしいテーマで開きたいものです。

「モノづくり愛知と台湾」と題し、輸送用機器に関する「モノづくり」をテーマに論じたのは、そのためです。愛知県は「モノづくり愛知」を自称し、特に輸送用機器の製造が盛んです。自動車だけでなく、鉄道車両、航空機部品が多数製造されています。そのような地域で、台湾の輸送用機器を語ってもらうことを企画しました。コメンテータの佐藤幸人先生から指摘された通り、台湾の「モノづくり」を議論するならば、半導体製造をまずは考えるべきですが、今回は愛知・名古屋で行うことを優先しました。

国際シンポジウムを市民に公開することで、問題となるのは言語です。今回は対面・オンラインのハイブリッド方式で、会場設備も最低限であることを考慮し、割り切りました。報告は、予稿を配布し、日本語でないものは日本語訳を作成することで済ませ、討論も逐次通訳としました。

シンポジウムの報告は、鉄道、自転車、航空機の研究者にお願いしました。第１報告の蔡龍保先生「戦後の台湾鉄道の車両系統と構造の変化」は、台湾の陸上輸送において重要な位置を占めた（旅客は今日でも重要である）鉄道について、歴史的見地から車両の変化を論じたものです。愛知県との関連も見出すことができます。

第２報告の謝斐宇先生「ＯＥＭから隠れたチャンピオンへ：戦後台湾自転車産業の発展史」は、台湾の輸送用機器製造でも世界に冠たる位置にある自転車について、その技術的発展を論じたものです。台湾企業の特性がどう活かされたかを議論しています。

第３報告の大石恵先生「戦後台湾の航空産業：部品サプライヤーへの道」は、日本同様に部品サプライヤーとして活きる、台湾の航空産業のあり方を議論しています。

愛知・名古屋といえば、自動車を無視できませんが、今回の報告には含めていません。人選の都合が大きいですが、各報告でも明示・暗示した通り、自動車製造は輸送用機器を考えるにあたり、全ての前提であるからです。すなわち鉄道であれ、自転車であれ、航空機であれ、そのモノづくりは自動車のモノづくりを参照・比較するところがあります。今回のシンポジウムで、その参照・比較（対自動車だけでなく、鉄道、自転車、航空機それぞれとの）が活きたか、そして愛知と台湾との関係についての議論ができたかと言われると、企画者の力量もあり、不十分だったかと思いますが、今後の議論の手掛かりなれば幸いです。

〈分科会企画〉

第１分科会（歴史学）

「描かれた」台湾鉄道／「描かれなかった」台湾鉄道
：台湾交通をめぐる美術表象史

駒込武（京都大学）

企画責任者：松葉隼（早稲田大学）
座長：駒込武（京都大学）
報告１：福田栞（一橋大学・院生）

「日本統治期台湾における「鉄道美術」をめぐる一考察」
報告２：松葉隼（早稲田大学）
「台湾の交通をめぐる宣伝と美術：「イメージ」構築戦略をめぐる異同」
コメンテーター：三澤真美恵（日本大学）、鈴木恵可（中央研究院）

第１分科会では「美術表象史」という観点から日本統治期の台湾を検討することになった。

福田栞会員による第一報告では、近代科学文明と産業革命を代表する鉄道は欧米でも日本でも「鉄道美術」と呼ばれるジャンルを生みだしてきたことを確認したうえで、台湾の場合にも台展開設の翌年（1928 年）から「鉄道美術」が増加するものの、「駅」を描く場合にも不特定多数の人びとがダイナミックに行き交う場としてではなく、駅をとりまく景観の一部として描かれる（例外は戦時下では兵士を送り出す場として描写されるケース）一方、蒸気機関車など列車そのものを正面から描く作品が現時点でほとんど見当たらないことを指摘した。また、その要因のひとつとして台湾人芸術家が台湾の近代性よりも「地方色」豊かな表現を求められていたという解釈を提示した。

松葉隼会員による第二報告では、ポスターや絵はがき、時刻表や旅行ガイドを分析対象とした。『台湾鉄道旅行案内』や 1920 年代後半から 30 年代前半にかけて鉄道部の作成したリーフレットやパンフレットでは画家・石川欽一郎による風景画などを取り入ながらも、全体として内地の「趣味」に応えるべく「南国」らしさを打ち出すという「外向き」の姿勢を示す一方、機関車乗務員互助会の作成した絵葉書や『台湾鉄道』における鉄道労働者の図案などはそうした「南国」趣味と異質だったものの鉄道員のあいだで共有される「内向き」の媒体であったことに注意を促し、両者の中間に存在するはずの台湾島内の一般の旅行者の眼差しが不在であったことを浮き彫りにした。

鈴木恵可会員のコメントでは、彫刻史・美術史を専攻する者として日本台湾学会学術大会において美術史関係のテーマが初めてとりあげられることの画期的な意義が指摘された上で、報告者の論文で提示しているもの以外にも台展・府展で鉄道を描いた作品があることや、鉄道や線路を視界に含めた美術写真やグラフの存在、1945 年～50 年頃の台湾における「鉄道美術」に注意を促し、鉄道が美術に与えたインパクトを総体として解明していく必要が提起された。

三澤会員のコメントでは、台湾において台湾美術史の再構築が進められているが、その中で本報告はどのように位置付けられるのか、そもそも「美術」をどのようなものとして定義するのかという問いが提起された。また、福田報告でとりあげた翁崑徳《プラットフォーム》に着目し、プラットフォームで日の丸の旗を打ち振る人々を主題としているものの、あえて柵の向こう側にいる人々として描くことで「ファナティックな時代を異質なものとして（檻の中の動物のように）描いている可能性はないか？」という解釈の可能性を問いかけた。また福田報告では台湾人画家も登場するのに対して、松葉報告では具体的に台湾人が登場しないのは、「近代性（鉄道、美術）」へのアクセス権に限界があり、絵画、デザイン、スタンプなどジャンルによって参与する民族が異なっていたのか？という問題を提起した。

フロアーからの質疑の中では、鉄道美術の中で台湾の名所として知られる土地（たとえば阿里山鉄道と阿里山）があまりとりあげられていないとしたらその理由はなにか、なぜ多様な属性の人々が行き交う駅の状況が描かれることが少ないのか、といった問題が投げかけられた。

これらの問いはいずれも即座に回答することが容易ではなく、報告者も応答に悩む場面が見受けられた。それは絵葉書レベルまで含めるならば対象とすべき資料があまりに膨大であるのに加えて、絵画やデザインという非言語的資料が多様な解釈の余地を残しているためと考えら

れる。広義の美術史の難しさを示すものであるが、実はわたしたちの社会生活で日常的にどう解釈してよいかわからない事態に遭遇していることを考えるならば、その曖昧さこそが台湾社会のリアリティに迫るための重要な手がかりなのだと感じられた。

第２分科会

自由論題（宗教学・歴史社会学）

北村嘉恵（北海道大学）

座長：北村嘉恵（北海道大学）
報告 1：陳宣聿（大谷大学）
「台湾における胎児生命尊重運動の展開――カトリック系プロライフ団体の動きを軸に」
報告 2：野嶋剛（大東文化大学）
「桃園神社再建をめぐる 1985 年の論争と保存決定のプロセス――過渡期の台湾における 2 つのナショナリズムの相克」
コメンテーター：岡田紅理子（ノートルダム清心女子大学）、角南聡一郎（日本台湾学会会員）

第２分科会では、現代宗教の胎児生命観や集団的な歴史記憶の場（モノ）をめぐるアクチュアルな課題に関わり、台湾社会の具体的な動向に即して発題がなされ、フロアからの活発な質問提起を得て、多角的に議論を深めていく可能性と重要性が示される場となった。以下、二人のコメンテーターの視点からそのエッセンスをお届けする。

陳報告では、中絶反対を目指す台湾カトリック教会の「戦略」について、カトリック教会の社会教説と世界的なプロライフ運動の関連から検討された。欧米諸国では 1960 年代後半から、女性の身体的自由の追求を背景として中絶に対する制限が緩和される一方で、「胎児」の生命尊重を唱える「プロライフ」の観点から中絶反対を主張する運動が続いてきた。プロライフ運動におけるキリスト教諸教派・教団の存在感は見逃せない。台湾では、事実上の中絶合法化する優生保健法が 1985 年に施行されて以来沈静化していた中絶論争が、高齢化や少子化への危機感が高まるなか、中絶件数が出生率を上回ったとの推計が明らかとなった 2000 年代以降、優生保健法の改訂をめぐる議論とあわせて再燃した。2003 年には、プロ・ライフとともに同法改訂を訴え、カトリック教会を中心とする諸宗教の連合である「尊重生命全民運動大聯盟」が設立され、またカトリック教会単独では、2008 年にプロ・ライフの啓発教育を担う「聖ジャンナ・プロライフセンター」が新竹教区域内に設立された。その活動は、政治的また社会的影響力を持ち得てはいないが、社会教説に従って中絶反対の実現を目指し、キリスト教のネットワークを活用しながら活動を続けているという。

同報告に対しては、カトリック教会内部でも社会教説の捉え方に変化が生じていることと関連し、社会教説にとどまらないリプロダクティブ・ライツ＆ヘルスをめぐるカトリック教会を含むキリスト教会全体で実際に起きている多様な動きを、他地域の事例を踏まえながら整理する必要性があると指摘した。（岡田紅理子）

野嶋報告は以下のようなものであった。日本統治時代台湾で建築された神社が、戦後神社は解体・破壊の対象となり、大型の神社は革命や抗日の英雄を祀る忠烈祠などに改築された。1985 年、原建築の姿をとどめていた桃園県忠烈祠の「桃園神社」建築を解体し、忠烈祠を新築

する方針を桃園県政府が打ち出した。これに対して神社建築の価値を惜しんだ文化界・学術界の有志が保存運動を展開し、県政府が方針を覆すという異例の経緯をたどった。当時の国民党政府の党国体制のなかで、いかなる「説得」の方法を用いて神社保存が実現されたのか、当時の保存運動に関わった関係者の証言、一次資料、メディア報道などから、保存を成功に導くキャンペーンのプロセスと、保存のためのロジックの構築がいかに行われたのかの検証がなされた。

これに対して評者の角南は、歴史民俗資料学の立場から、朝鮮総督府本庁の解体や、大阪人権博物館の閉館といった事例をあげながら、歴史的事実を婉曲することの重要性について述べた。これが常に基本であり、それをもとにメディアなどが展開することが理想であろうと考える。野嶋が注目する、現代において歴史的建造物がどのように語られたか、についても未来の学問にあっては重要であり、その記録や検討は現代的意味を持つことを指摘した。（角南聡一郎）

第３分科会

自由論題（文学）

豊田周子(名城大学)

座長：豊田周子(名城大学)
報告１：謝惠貞(文藻外語大学)
「在日台湾人作家李琴峰『彼岸花が咲く島』研究――方法としてのクレオールと政治的寓話」
報告２：和泉司（豊橋技術科学大学）
「戦後日本語ミステリー小説における「台湾」――海渡英祐「極東特派員」（1961）を検討する」
コメンテーター：三須祐介（立命館大学）、張文菁(愛知県立大学)

本分科会の一つ目の報告は、謝氏による「在日台湾人作家李琴峰『彼岸花が咲く島』研究――方法としてのクレオールと政治的寓話」であった。本報告は、「性別役割分業」というジェンダー秩序が、作中において逆転して描かれていることの意味を読み解こうとするものであった。謝氏はまず、物語の舞台であるこの〈島〉は、クレオール語として〈ニホン語〉が話され多文化が共生する理想郷である一方で、〈女語〉が特権化されるなど、麻薬の原料として〈島〉に経済効果をもたらす必要悪の「彼岸花」と同じく、二面性を持つことを指摘した。そのなかで、登場人物である宇実たちが話すピジン語的な会話が、言語共同体としての〈島〉の単一性を撹乱しているとも述べた。

次に、島の運営を采配するノロの階級が、男性主導の戦争や、家父長制、近代資本主義、また帝国主義に対抗するため、沖縄や台湾にみられる民間信仰を借りて、この島の時間を前近代的なものにしていると述べた。またこうしたノロの存在は、ベネディクト・アンダーソンが東南アジアに見出した「比較の亡霊」のように、「二重写しのヴィジョン」を持つとともに、ナショナリズムに連なる危険性を秘めているとした。

一方、ノロたちが、沖縄における集団自決のような大国支配の悲劇を回避しようとするあまり、〈島〉の負の歴史を隠蔽する「歴史修正主義」に陥っていることにも触れた。そして、『ガリヴァー旅行記』の「バルニバービ」国を彷彿させるこの〈島〉は、ユートピア的な側面

と同時に、歴史の忘却を引き起こしかねないディストピア的な側面をも併せ持つとの見解を示した。

コメンテーターの三須会員からは、語り手の理屈っぽさや、登場人物である拓慈のトランスジェンダー性に関する質疑があり、フロアからは、〈女語〉と漢文訓読との類似性について、またクレオールという概念の有効性に関する質問などが相次いだ。

二つ目の報告は、和泉氏による「戦後日本語ミステリー小説における「台湾」――海渡英祐「極東特派員」（1961）を検討する」であった。和泉氏はまず、海渡英祐（1934－？）の経歴について紹介した。ここでは、戦前戦中を旧満洲で過ごし、大学時代に作家・高木彬光の助手を始め、代表作「成吉思汗の秘密」の資料収集に携わり、これらの経験から海渡もミステリー作家を志したことを述べた。

その後、「極東特派員」は海渡のデビュー作であり、戦後日本における国際スパイミステリー小説の嚆矢であることに触れ、海渡は台湾独立運動をテーマとし、日系アメリカ人の通信記者が蒋介石暗殺計画に巻き込まれていくストーリーのなかで、台湾独立運動や国民党政権下の台湾の状況を詳細に描いたことに言及した。その一方で、海渡自身は台湾に個人的な縁故も持っておらず、国際スパイミステリー小説に最適な素材として「台湾」を選んだにすぎないとも指摘した。

さらに氏は、従来、戦後日本社会は急速に台湾統治の過去を忘却していったと言われてきたが、海渡のように台湾と縁故のない人物が関心を台湾に寄せる状況も生まれていることを強調した。そして、「極東特派員」は戦後日本の「台湾」への関心の有り様を見直す契機にもなりうる作品であると位置づけた。

この報告に対し、コメンテーターの張会員からは、「極東特派員」誕生前後の日本のスパイミステリー小説の系譜が示され、またフロアからは、海渡の旧満洲経験の影響も考えるべきではないかという指摘や、1961 年には「極東特派員」以外にも「台湾」に関する書籍が複数出版されていることの理由について質問がなされた。

1960 年代と 2020 年代の日本社会を映し出す二篇の作品をめぐる報告を通して、戦後から今日に至るまでの、日本の歴史認識問題について改めて考えさせられた。今後はこうした国際的視野を具えた作品の研究が、閉鎖的な日本社会に風穴を開ける意味においてもますます重要性を帯びてくるのだろう。

第４・８分科会（歴史学）

1920-1930 年代植民地台湾メディアにおける情報流通構造と表現スタイルの受容

許時嘉（山形大学）

企画責任者：許時嘉（山形大学）
座長：陳培豊(中央研究院)
報告１：許時嘉（山形大学）
「『台湾民報』における日本語新聞の転載と翻訳：王敏川の翻訳活動を中心に」
報告２：荘勝全(中央研究院)
「地政学的な変化における情報伝達の実態：『台湾新民報』の中国報道記事を例として」
報告３：陳偉智(中央研究院)
「上海行きの「黒猫・黒犬」：陳炳煌と『鶏籠生漫画集』」

コメンテーター：松田京子（南山大学）、城山拓也（東北学院大学）

本企画では、1920～1930 年代『台湾民報』（以下、『民報』と略す）と『台湾新民報』（以下、『新民報』と略す）における日本・中国情報と欧米の表現技法の受容状況に注目し、植民地台湾と他地域との知的交流がどのようなルートで成り立ち、また、台湾人民族運動家の知識体系の形成や地域間の知識交流、情報の再生産、表現スタイルの受容はいかなるもので、それは彼らの世界観の構築にいかなる影響を与えたのか、という問題を解明した。

許時嘉氏の報告は『民報』の編集者だった王敏川（1887-1942）の翻訳活動に注目し、1926-1927 年文協分裂前後に際して右派から左派に傾倒した彼の思想と方向転換の実態の解明を試みた。日本内地の原文と王の翻訳を照合した結果、一部は内容の取捨選択とレトリックの書き換えが見られたことから、王は議会設置請願運動（以下、議会運動）の促進に役立つ内容を好んで掲載し、都合に応じて削除したり改変したりする編集傾向をもち、1926 年 1 月の時点までは議会運動の実現可能性とその論理の正当性を心から信じていたことが明らかになった。一方、1926 年 1 月以降、王の文章は『民報』では見出せないが、1926 年 5 月から文協講演会に定期的に参加した彼の演題から、濃厚な左翼的色彩を持つ傾向が確認できた。1926 年２～３月に若槻首相がはじめて議会運動を憲法違反だと明言して以来、文協内部の政治的結社の議論が浮上し、王の思想の方向転換がそれと歩みをそろえた可能性が高かったという結論で締めくくられた。

許報告に対して松田京子氏は、翻訳活動を通じて民報論者たちの能動性と創造性のあり方を解明するという挑戦的な方法を評価した一方、検閲への配慮の度合いと王の「急進的な」方向転換に関する論拠の所在を質問した。また会場からは、冨田哲氏が白話文の過渡期における民報論者の文体表現の混在が王の翻訳に影響を与える可能性について提起し、三澤真美恵氏が訳語の諸概念が定まっていない可能性について質問した。さらに、オンライン参加の若林正丈氏からは、王の方向転換は、同時代急変する中国情勢に対する民報論者の関心（1926 年間の中国社会改造論戦）及び台湾人アイデンティティ意識の萌芽（台湾憲法論）と関わる可能性が無視できないと指摘した。

荘勝全氏の報告では『民報』系列紙の中国報道に焦点を合わせ、記者黄旺成の満州事変の報道の特徴から、『新民報』における「中国時事」コラム（1930 年４月成立）の成立経緯、情報源、入手経路、報道戦略が考察された。1920 年代中期国民党が中国統一を目標とする北伐を発動して以降、台湾の民族運動家たちは中国への期待が高まり、統一され強くなった中国の力を借りて、日本の植民地支配から脱却することを望むようになった。このような中国情報の需要性が高まる中、中国情報の「中国時事」コラムが作られた。時間差と単一の情報源が絶たれてしまう懸念があったため、紙面の責任者であった黄旺成は、満洲事変をリアルタイムに伝える『大阪朝日新聞』等の日本語新聞と、中国情勢を忠実的に伝えるが、物理的に入手時間がかかる中国語新聞『大公報』を併用することで重層的に中国の情報源を整え、時差のある二重報道が行われたことを、本報告は明らかにした。

荘報告に対して松田京子氏は、多様なリソースの利用が『新民報』の報道上の「能動性」への解明につながる点を評価し、『大阪朝日新聞』の記事を基にする満州事変の報道には黄の恣意的な加筆表現が混在するのはなぜなのか、満州事変前に軍部への批判が強かった『大阪朝日新聞』は事変後に右翼勢力のボイコットを乗り越えるために論調の方向転換が起こったが、黄はそれをリソースとする原因とは何か、と質問した。また、会場の呉密察氏は、復刻版の『新民報』は東方文化出版社主の婁子匡による自己検閲があり、複数の時代の検閲が混在している現象を指摘した。

陳偉智氏の報告では、鶏籠生のペンネームを用いて日刊紙『新民報』に時事ギャグ漫画と評論随筆を発表した陳炳煌の作品集『鶏籠生漫画集』を考察し、国境を越えた表現スタイルの受容とその意義が検討された。陳炳煌は、当時台湾の流行語である「黒猫（モガ）・黒犬（モボ）」を、動物を擬人化した漫画のキャラクターとみなした上で、普遍的な都市文化現象を風刺し、アメリカの『クレイジー・カット（Krazy Kat）』、『フィリックス・ザ・キャット（Felix the cat）』、『親爺教育（Bringing up father）』などから影響を受けた台湾の土着的な「黒猫黒犬」漫画キャラクターが展開した、と指摘した。陳炳煌の漫画作品でローカライズされた黒猫・黒犬という存在は、一国の単独な視点から解放され、複数のナショナル・ヒストリーに跨る新たな研究対象の可能性を示していると述べられた。

陳報告に対して城山拓也氏は、中国の「漫画（mànhuà）」と日本の「マンガ」の系譜の違いと、漫画作品を戦前から戦後へのグランドヒストリーに置いて語る際の諸問題を示し、陳報告が漫画の表現技法と表現スタイルに集中することで漫画自身の歴史を語ろうとする姿勢を高く評価した。また、上海漫画界での陳炳煌の位置づけ、台湾における陳炳煌の評価と受容について質問した。座長の陳培豊氏は、同時代『キング』という大衆を対象とする通俗雑誌の流行を提起し、陳炳煌が考案した読者像への再考を促した。また、会場からは、同時代日本の動物擬人化マンガ・田河水泡『のらくろ』から影響を受けた可能性（顔杏如氏）、陳炳煌上海在住時の劉吶鷗や郭建英との交遊関係（謝恵貞氏）、上海漫画家たちの戦後の反省と一線を画し、読者と近い立場にいる自分を自負した陳炳煌の心理変化（趙偵宇氏）、戦後廖文毅主宰の『前鋒』雑誌への寄稿からみる陳炳煌の政治的立場（張彩薇氏）、戦後米政府の対台軍事・経済援助を背景に発足した農村啓蒙活動には陳が取り組んでいたが、その波及力がいかがなものなのか（呉密察氏）、という多くの質問が寄せられ、所定終了時間より１時間以上も超過した活発な議論が行われた。この場を借りて、本企画に参加してくださった皆さんに御礼を申し上げる。

第５分科会

自由論題（文学・映画）

唐顥芸（同志社大学）

座長：唐顥芸（同志社大学）
報告１：伊蒙楽（一橋大学・院生）
「鍾理和の 1950 年代作品に関する考察――台湾人作家による中国叙述の一例として」
報告２：呉穎濤（大阪大学・院生）
「『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』における越境する間テクスト性と抒情――師弟伝承とその表象をめぐって」
コメンテーター：澤井律之（京都光華女子大学）、小笠原淳（熊本学園大学）

伊蒙楽会員による報告では、鍾理和の 1950 年代作品においては異色作である「原郷人」を取り上げて、先行研究の成果を踏まえながら、作中で「中国」が提起されたことの意義を明らかにすると同時に、「原郷人」について新たな解釈の可能性を探究した。報告では、まず「原郷人」の創作背景と経緯を整理し、本省人作家が周縁化されている状況の中で、鍾理和は文友通訊作家群の一員として、台湾文学への関心を高め、当時主流となっていた反共文学への対抗意識を見せ

るようになったことが述べられた。発表者はこうした対立・対抗をも一種の交流であると見做し、「異流派交流」の視点から鍾理和の文学創作と文学活動を解釈した。さらに、香港『亜洲画報』に応募するために創作した「原郷人」からは、作者自身の立場に関する主張や、反共作家たちへの晦渋の対抗を読み取ることができると考察した。また、「原郷人」の中で「中国」を提起することの意義については、あくまで台湾人と区別する「他者」の存在であり、台湾人共通の記憶・感情を喚起するための道具であると分析した。

コメンテーターの澤井律之会員からは、まず、報告における鍾理和に関する記述の間違いや、台湾人研究者の鍾理和研究を参考する必要性を指摘した。また、50 年代の白色テロにおいて政治批判ができなくなったのは、鍾理和のみならず全ての作家に関していえることではないかと疑問を呈した。50 年代の反共文学について、張文菁会員の著書『通俗小説からみる文学史』を読んだ上で再検討するように助言した。さらに、文友通訊作家群における香港『亜洲画報』への投稿活動は、投稿可能なメディアに投稿しただけではないかと質問した。それに対し、伊会員は「傾巣而出」などの言葉を使用した文友通訊中心メンバー鍾肇政の態度から、その投稿活動は単なる投稿可能なメディアに投稿したことに留まらず、より深い意義を持っているように考えられるという応答がなされた。

呉穎濤会員による報告では、2007 年にオルセー美術館からの依頼を受け、侯孝賢が制作したフランス語映画『レッド・バルーン』における台湾の布袋戯と、フランスの人形劇の形式で上演された元代の雑劇「張生煮海」の役割を、作中の「張生煮海」にみる李天祿と胡蘭成から受けた影響を通して解釈・分析した。また、これを手がかりに、映画のテーマとそれを表現するために侯孝賢が用いた美学的手法を明らかにし、最終的に侯の美学から見た映画への理解について再考した。まず、映画における李傳燦の「張羽煮海」布袋戯の演出は、フランスですでに有名になった李天祿とその継承者を通じて、文化交流の伝統の一例を示したといえる。一方、侯孝賢は胡蘭成が朱天文宛てに書いた手紙、または朱天文の「記胡蘭成八書」を読むことを通じて、胡蘭成が書道の弟子である日本人の宮田武義のために書いた詩「求妻煮海人」を知ったと考えられる。侯孝賢がフランスの映画雑誌『François Truffaut』の記念号において、胡蘭成の手紙とほとんど同じ言葉で「張生煮海」を紹介したことからもその理解のルートがうかがえる。このように、『レッド・バルーン』における「張羽煮海」の使用には、ある種の越境する間テクスト性が見られるといえよう、と報告者は述べた。さらに、『レッド・バルーン』にみる記憶と伝承の表象、そして侯孝賢の映画美学と近代的抒情伝統との関わりを提示することも試みられた。

コメンテーターの小笠原淳会員からは、元代の雑劇「張生煮海」が胡蘭成の解釈を経て、侯孝賢の『レッド・バルーン』に取り込まれていった受容過程を考察している点を評価しつつも、胡蘭成の主観が大きく影響しているのに、中国の伝統が継承されているということについての違和感を述べた。中国伝統のテキストの継承について論じるなら、侯孝賢の映画『黒衣の刺客』（刺客聶隱娘）を参照する必要があることを提起した。さらに、全体的に論点がやや散漫であり、論述も独自性が欠けていることを指摘した。

機材のトラブルの影響により、フロアとの質疑応答の時間をとることができなかったが、発表者とコメンテーターの間で有意義な討論がなされて、充実した分科会となった。

冷戦アジアと華僑華人

陳 來幸編 分断の祖国と不安定な在地。明日の見えない世界で、血縁や「幇」など様々なつながりをたぐりながら生きた日々。聞き取りと史料から暮らしのディテールを掘り起こし、人々の「根」を探る。 四四〇〇円

辺境からの中国 黄海島嶼漁民の民族誌

緒方宏海著 島嶼社会の実態から、巨大な中国を俯瞰。辺境の島だからこそ顕著になっている諸現象を明らかにすることで、中国社会の実態とその未来が予測できる。 五五〇〇円

天津の鬼市 路上古物市場をめぐる〈空間〉と〈場所〉の人類学

櫻井 想著 「沈黙交易」に由来する「鬼市」は、天津において一〇〇年余の歴史を持つ古くて新しい存在だ。改革開放を経て巨大な市場経済国家となった中国でなお命脈を保つその謎に迫る。 四四〇〇円

華南 広東・海南の文化的多様性とエスニシティー

瀬川昌久著 中国南部を彩る文化のパッチワークは中国の中でも異彩を放つ。そこは文化的差異やエスニック・グループの生成・維持の関係という、普遍的な課題への挑戦の場でもあるのだ。 三八五〇円

日本軍政下ジャワの華僑社会 『共栄報』にみる統制と動員

津田浩司著 軍政諸施策や華僑社会の状況を知る唯一の活字メディアを、同時代資料と対照し批判的に検討。日本の南方軍政が東南アジア華僑社会にもたらした経験を、実証的に研究する重要な基盤。 六六〇〇円

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-19
TEL 03-3828-9249（価格はすべて税込）

風響社

本学会の会員向け【特価販売サイト】
（出版相談も受け付けます）

現代台湾史を掘り起こす 陳耀昌「花シリーズ三部作」

フォルモサの涙 獅頭社戦役

❖第二部 原題『獅頭花』

陳耀昌著／下村作次郎訳／A5判／税込2640円

一八七四年、日本軍が台湾に出兵した（牡丹社事件）。清朝政府は台湾防衛のため軍隊を派遣するが、彼らは日本軍ではなく、原住民と闘うことになった――。「開山撫番」政策下で起こった最初の原住民と漢族の戦争「獅頭社戦役」を描く歴史小説。

フォルモサに咲く花

❖第一部 原題『傀儡花』

陳耀昌著／下村作次郎訳／A5判／税込2640円

一八六七年、台湾南端の沖合でアメリカ船ローバー号が座礁し、船長以下13名が原住民族によって殺害された。本書はこの「ローバー号事件」の顛末を、おもに原住民の視点から、また、移民の歴史、台湾の風土なども盛り込みつつ描いた大河歴史小説。

離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録

許雪姫著／羽田朝子・殷晴・杉本史子訳／A5判／税込8800円

台湾人でありながら「日本人」でもあった彼らは、何故「満洲国」へ渡ったのか、現地でどのような生活を送ったのか。聞き取り調査と資料を駆使して実態を描き出す。

WEB 東方

東方書店のWEBマガジン
https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho
中国関係の書評やコラム、連載など読み応えたっぷり！
輸入書・国内書の図書情報や催事情報も充実しています。

東方書店
ホームページ〈中国・本の情報館〉https://www.toho-shoten.co.jp/ ＊価格10%税込
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3 ／営業電話 03-3937-0300 ／ FAX.03-3937-0955

第６分科会
自由論題（人類学・文学）

宮岡真央子（福岡大学）

座長：宮岡真央子（福岡大学）
報告１：清水美里（名桜大学）
「台湾人ホステスを描く揺れ――吉田修一『路』を事例に」
報告２：沼崎一郎（東北大学）
「リービ英雄における「家」と「故郷」――現代日本語小説の中の「台湾」と「日本」（３）」
コメンテーター：趙貞宇（南山大学）、木村自（立教大学）

第６分科会は、人類学・文学分野の自由論題２報告が行われた。清水報告「台湾人ホステスを描く揺れ――吉田修一『路』を事例に」では、吉田修一作『路』および、これを原作とするテレビドラマ『路～台湾エクスプレス』を分析した。原作者吉田修一の知名度、ドラマの日台同時放映によって本作はある程度の影響力を持ち続ける可能性がある。なかでも作中の「台湾人ホステス」表象は日台関係にナイーブな影響を与えるものと考える。そして、『路』の雑誌掲載時、単行本化、テレビドラマ化とテレビドラマ特別編集版のそれぞれのバージョンの中で、台湾人ホステスと日本人駐在員の恋愛関係に関する設定には何度も変更があった。『路』のなかの台湾人ホステス像は基本的にはステレオタイプなものではあるのだが、バージョンによってはホステスの拝金主義の否定やアジア人女性に真摯に謝る日本人男性の姿が描かれていた。これらはステレオタイプな表象を追い求めてしまう人々に一石を投じる表象でもあったと主張した。

コメンテーターの趙貞宇氏は、本報告が『路』の各バージョンの緻密な比較分析から先行研究の盲点となっていた部分を指摘し、『路』が描き出した「台湾」や「日台関係」を検討した点が評価されるべきであると述べた。また『路』という作品の位置づけに関していくつか質問があった。これに対して、清水会員からは『路』は観光小説であると応答した。

フロアの和泉司氏（豊橋技術科学大学）から、原作者の吉田はかつての売春ツアーを知っているのかという質問があり、清水氏からは作中に日本人男性の子どもを妊娠した台湾人女性が出てくるため知っているだろうと応答があった。藤井省三氏（名古屋外国語大学）からはラストシーンに関する質問があった。これに対して、清水氏からは原作では日本人駐在員と台湾人ホステスの二人は未来のない関係性と読めることを指摘した。

沼崎報告「リービ英雄における「家」と「故郷」――現代日本語小説の中の「台湾」と「日本」（３）」は、文学の人類学という視点から分析し、クリフォード・ギアツの「文化システム」概念を援用して、リービ英雄の文学作品における「家」と「故郷」の描写が、どのような台湾と日本の「現実についてのモデル（model of reality）」と「現実へのモデル（model for reality）」となっているかを検討した。先ず家については「持ち家モデル」、「借家モデル」、「シェアハウスモデル」の３つを析出した。持ち家モデルの具体例は、アメリカの母の家、横浜の「小型ホワイトハウス」である父の家、そして「よそ者を排除した団欒を秘めている」日本人の家々である。借家モデルの代表が台中の「日本人作的」家であるが、多民族・多言語が共在する現実についてのモデルすなわちシェアハウスモデルの原型でもある。『星条旗の聞こえない部屋』の主人公ベン・アイザックを招き入れた日本人学生・安藤の下宿もシェア

ハウスモデルの例である。次に、リービ英雄の描く「模範郷」は、人格的形成の基底をなす「原体験」をもたらした現実についてのモデルすなわち「原風景」についてのモデルであるとともに、多言語と多文化が混淆していく、言語と文化が「脱・持ち家化」されたシェアハウス的なコミュニティという理想的な現実へのモデルでもあると分析した。そして、リービ英雄の日本語についての所有権と借地権という問題提起を受けて、リービ英雄の作品群は、よそ者にとっても土地の者にとっても家も故郷も借り物に過ぎず、だからこそシェアハウスモデルが現実についてのモデルであると同時に現実へのモデルでもあるべきだと主張し、言語と文化の「脱・持ち家化」と積極的な「シェアハウス化」を求めているのだと結論づけた。

コメンテーターの木村自氏からは、ディアスポラ研究の視点からコメントがあり、借家モデルからシェアハウスモデルへの理論的な移行に飛躍があるのではないか、母の家も父の家も単純なモデル化をゆるさない複雑さを有しているのではないかという２点について質問があった。これに対して沼崎氏からは、文学作品における現実へのモデルには想像性と創造性が許されるので、借家という現実からシェアハウスという理想への飛躍が可能なのではないか、また母の家と父の家について母と父は持ち家モデルを抱いているが、主人公のベンはその虚構性を見抜いているとリービ英雄は描いているのではないかとの応答があった。

フロアの藤井省三氏からは、リービ英雄作品における父子対立、特に漢学者で中国語信奉者の父の息子に対する態度、さらに最近のリービ英雄作品の主題が中国やチベットである点について質問があり、沼崎氏からは、父子対立にアメリカ的な特徴が見られるのではないか、父にとっての漢学・中国語は所有の対象であり、それはアメリカの日本学の傾向をも象徴しているのではないか、幼少時の原体験としての中国語習得がリービ英雄を大陸に誘っているのではないかとの応答があった。

会場には文学や文化人類学を中心に多様な分野の会員が多く集まり、充実した議論が展開された。多分野が集う本学会の魅力が発揮された分科会であった。

第７分科会
自由論題（農村計画学）

堀内義隆（三重大学）

座長：堀内義隆（三重大学）
報告：佐々木孝子（早稲田大学）
「社区発展協会会員のパーソナルネットワークに関する研究」
コメンテーター：菅野敦志（共立女子大学）

第７分科会では、佐々木孝子会員により、「社区営造」をテーマとする報告が行われた。「社区営造」とは、「有志の住民が設立する住民組織である社区発展協会が社区営造事業の実施主体として計画作成に参加し、補助金申請を行う」という地域づくりの手法・制度であり、日本のまちづくり制度を模したものであるとされる。報告者は、先行研究が社区発展協会幹部のみに焦点を当てがちであったために、住民参加型の社区営造が台湾社会にどのような影響をもたらしたかについては未解明な点が多いと指摘し、一般会員を分析対象とすることにより、活動参加者に対する社区営造の影響を明らかにしようとした。方法としては、会員の個人ネッ

トワークの様相を把握したうえで、そこにまちづくりの基盤となる「地域のまとまり」が生まれているかどうかを考察するものである。

報告では、屏東県内にあるＡ村の社区発展協会の会員 44 名を調査対象としたアンケートおよびネットワーク調査の結果が示された。調査は、各々の回答者の５人の「近しい人」について、公私にわたるいくつかの事項のサポート源を尋ねるものであり、結果は以下のように整理された。まず、会員間には社区発展協会を契機とする個人ネットワークが構築されていた。このネットワークは社区営造関連の事項について機能する一方で、私的な事項に関するサポート源としても機能していた。また、「近しい人」の 46%は村内在住であり、回答者は会員間だけでなく、家族、友人、近隣の人とも社区営造に関する事項を話していた。会員間には社会的・心理的関係および地域に対する関心が形成されており、「地域のまとまり」が醸成されていると判断された。さらに、このネットワークが従来あまり外出の機会がなかった主婦や高齢者に社会的居場所を提供しうることも示唆された。

コメンテーターの菅野敦志会員からは、マクロの視点として日本との比較や既存研究との関連性などについては、本報告では未消化のままである、ミクロの視点として本報告の調査は報告者と調査対象との長年の信頼関係に基づくものであるという評価がなされ、質問として、①社区発展協会がうまく機能しないケースはどのようなものか、②本報告は良い結果が見込まれる条件を備えた事例ではないか、③本報告の調査対象とならなかった非会員の実態はどうなっているか、④日本側の問題解決に向けて参照できる点はあるか、などが出された。報告者からは、①協会に主体性がなく政策をうまく活用できないケース、②20 年間の活動経緯に関する説明と、本報告は「良い条件」ありきの事例ではない旨の回答、③非会員は村外の家族・親戚に頼る傾向が強い、④報告者が現在進行中の調査で考察しようとしている、といった返答がなされたが、菅野会員の指摘は、社区営造の評価や、助成金事業というトップダウン型の地域づくりにおいて住民の自主性をどうとらえるかといった大きな課題を前に、本事例がどの程度の普遍性を持つのかという問いかけであったといえる。フロアからは、社区発展協会の仕組みおよび自治会と同次元で捉えることの是非に関する質問や、本事例の状況が質問者のフィールドとは異なるとの話がでた。これらは、社区営造がまちづくり以上に多様性の高い展開をしていることを示すものであり、今後、明確な分析視角に基づいた事例研究のさらなる蓄積が必要であることが認識された。

第９分科会（文学・芸術）

写真学・建築学の視点から読む『孽子』とその背景

垂水千恵（横浜国立大学）

企画責任者：垂水千恵（横浜国立大学）
座長：垂水千恵（横浜国立大学）
報告Ｉ：寺田健人（横浜国立大学・院生）
「『孽子』における写真の効果とその意味 ――共同体と写真実践の観点から――」
報告２：中村遥（横浜国立大学・院生）
「日本統治時代の建築・都市論から読む『孽子』」
コメンテーター：王睿妍（北京大学・院生）、八木はるな（中央大学）

第９分科会は台湾現代文学・同志文学の金字塔とも言える白先勇の『孽子』を文学研究以外の領域の若手研究者が読むことにより、これまで見えてこなかった『孽子』及び台湾文学の可能性を追求できないか、という趣旨で企画された。

第一報告者の寺田健人会員は写真理論を専攻する研究者であると同時に、クィア実践としての家族写真をテーマとする写真家でもある。寺田はその報告の中で『孽子』に登場する写真の描写を取り上げ、『孽子』における写真の描写が物語の中でどのような効果を持っているのかを言及した。分析にあたって写っている登場人物が属するコミュニティを「家族」、「王国」の二つに分類し、それぞれのコミュニティでの写真の描写とその効果を比較し整理した。また、写真の鑑賞体験の違いに注目し、『孽子』おいては写真それ自体が描写されているのではなく、私（阿青）が眼差した写真が描写されている点を強調した。結論として、『孽子』は全体のフレームそのものが「写真的」なのであること、異性愛主義的な家父長制の「家族写真」と、擬似的な父親による「王国の写真」について眼差しの継承のプロセスを明らかにした。

近代建築のコンバージョンに関する比較研究を専門とする第２報告者の中村遥会員は、その報告において『孽子』の中心的舞台となる新公園を取り上げ、『孽子』におけるフィクションの中の新公園と、現実に存在している新公園の関係性を明らかにすることを目的とした。研究方法として、新公園の位置づけを「近代都市公園史」、「台北市」、「男性同性愛者が集まる場」、「『孽子』と現実の新公園」の４つの方向から整理し、『孽子』における新公園が持つ空間的機能の可能性を模索することを試みた。結論として、日本統治時代に計画された現実の新公園が権威主義的空間として機能し、『孽子』における「我々の王国」としての新公園は同じ性質を持っていること、現実の新公園が計画された当初では予想もされなかった激情的な政治空間、反権力の空間として、現実、『孽子』における新公園、両者ともに機能していたことを明らかにした。

これらの報告に対して、台湾文学研究を専門とするコメンテーターの王睿妍会員は、従来の文学研究手法の外に写真理論的な視点を導入し、文字描写によって写真を想像する行為と、実際の写真を鑑賞する行為の違いを論じることで、テクスト内外の複数の参与者をインタラクティブな視線で結びつけ、一人ひとりのダイナミズムを活性化させた寺田論文の斬新さを高く評価した。

また、白先勇研究の第一人者である八木はるな会員は、中村論文を評価するにあたって、まずは台湾における『孽子』の解読の変遷を大まかにまとめた上で、これまでは、その中の新公園と、そこに集合するゲイたちの描かれ方の分析を通して、家とナショナリズムの問題が考察されてきた、と指摘した。それに対し、空間を主体とする中村論文の魅力は、その立脚点はもとより、論述にやや揺らぎがあることそれ自体、すなわち筆者自身が、文学の中の想像空間と現実の空間を幾度も往還しながら「新公園」を認識していく様子、それを読者に気づかせる点ではなかろうか、としてコメントを結んだ。

続く質疑応答では、寺田会員に対し、「王国」の範囲をどのように捉えるのかという質問がなされ、それに対して寺田会員は今回の報告では『青春鳥集』が王国の歴史を作り継承するものである点を強調したが、今後は、王国が青春鳥以外の要素をどのように取り入れてその輪郭を作り得ているのかについて検討していきたい、と答えた。また、中村会員に対しては、男性同性愛が集まる場所としての新公園は、読者が「野」の資料と現実とを往還して作り上げる空間であり、『孽子』以外の文学における新公園の描かれ方はどうであるのか、といった質問や、作中では新宿御苑とされているが、白先勇が実際に取材したのは明治神宮外苑であったという指摘がなされ、今後の研究発展への大きな示唆となった。

時間の都合上、会場での発言ができなかった参加者からも文学の領域外の若手研究者であるからこその、報告者二人の斬新な切り口を評価する声が寄せられ、本企画の目的はまずまずの達成を遂げたと言えるであろう。

第 10 分科会

自由論題(文化史・文学)

冨田哲(淡江大学)

座長：冨田哲(淡江大学)
報告１：鈴木 恵可(中央研究院)、マグダレナ・コウオジェイ(東洋英和女学院大学)
「呉天華（1911－1987）・小嶋久子（1921－2011）夫妻の画業とその人生――台湾と日本の美術史をつなぐ」
報告２：呂美親(台湾師範大学)
「戒厳令解除前後における台湾語詩の「政治」および「郷土」： 鄭良偉編『台語詩六家選』を中心として」

第一報告の鈴木・コウオジェイ両氏は、日本統治期の彰化に生まれ東京美術学校で藤島武二などに師事した呉天華と、千葉県出身で女子美術専門学校を出た小嶋久子という画家夫妻に注目した。

呉は戦後も創作を続けたが、基本的には作品を売らず画壇からも距離をとっていた。1979 年に夫婦そろっておそらく戦後初めて台湾に帰省、以後は頻繁に台湾に戻り、展覧会への出品もおこなっている。呉は静物画が主で、収集していた中国の陶磁器を主題とする作品も多く、「中国」に対する憧憬もうかがえるが、台湾を題材としたものはほぼみあたらないという。
一方、小嶋は６人の子育てに忙しく、絵筆をとることも少なかったが、呉とともに同じモデルをえがいた作品がいくつか残されている。子どもの成長後は展覧会に出品することもあったようだが、後年、作品の大部分をみずから処分してしまった。遺族が経営するギャラリー所蔵の作品は、呉のものと確認できるものが 623 点なのに対して、小嶋のものは 11 点にすぎない。

呉、小嶋とも世に知られるような作品は残していないが、鈴木・コウオジェイ両氏は、無名の画家の「特色あるライフヒストリーを抽出する」マイクロ美術史のアプローチが、かれらを語るにはふさわしいと考える。日本美術史や台湾美術史といった大文字の美術史の文脈ではなく、夫妻の創作活動や生活の断片から、日本と台湾の美術史をつなぐ存在として二人をとらえたいとのことであった。

以上の報告に対して、コメンテーターの羽田ジェシカ氏は、遺族への聞きとりにくわえ、一次資料なども利用してより客観的な分析を進める必要があると指摘した。また他の画家とも対照しつつ、作品中の視覚記号を読みとっていく作業も欠かせないとした。たとえば、呉の作品の中には、結婚前後に夫婦で入学した東京美術学校研究科の指導教授である安井曾太郎の作品と構図や題材、画風が類似しているものが多く見られるという。また、戦後のある時期、呉が「左派系立場をとっていた」という両氏の見立てに対しては、呉の「中国」憧憬の内実をより慎重にみきわめる必要があるとも述べた(共産党政権への共感？清朝期までの中国への回帰？)。

第二報告の呂氏は、鄭良偉が1990年に編纂した『台語詩六家選』をとりあげた。『台語詩六

家選』には林宗源、黄勁連、黄樹根、宋澤莱、向陽、林央敏の作品が収録されているが、鄭はまた、台湾人の「母語」の文字化の意義も同書の序文で強調している。呂氏は同書が「台湾語文学作品の正典化にも寄与」するものだったとし、詩人たちが台湾意識にもとづき「郷土」をどのように描写し、またいかなる「政治」主張をおこなっていたのかを論じた。

蕭阿勤によれば、ナショナル・アイデンティティの確立を旨として台湾文学が形成されていくのは1980年代からということになる。『台語詩六家選』にはあわせて56篇が収録されており(1980年代以前のものもふくまれている)、そのうち林宗源が1980年に書き上げた「一支針補出一个無仝款的世界」からは、みずからの郷土としての台湾をネーションとして構築していこうという意志が感じられるという。さらに林宗源より若い1955年生まれの林央敏の1987年の「毋通嫌台灣」と「唐山變台灣」(台湾語版)の二つの詩は、漢人の移住先たる台湾でのあらたな国家の誕生を前提としている。宋澤莱の「若是到恆春」(1981年)は、楽観的で温かい「郷土」台湾をえがきだしている。教科書や歌をとおして広く知られる向陽の「阿爹的飯包」は1976年に書かれた「方言詩」であるが、それが『台語詩六家選』におさめられたことに呂氏は、まだ「方言」で書くことに慎重にならざるをえなかった時期の作品との対話の含意をみいだす。

以上に対してコメンテーターの林初梅氏は、『台語詩六家選』の歴史的意義をより明確に提示すべきだと指摘した。『台語詩六家選』の作品の初出の多くは1970年代から80年代にかけてであるが、本報告ではその全体的な分析はおこなわれておらず、なぜ『台語詩六家選』をもちいて台湾意識の萌芽から台湾語文学の形成をあとづけようとするのかということである。たとえば同時期には、鄭とは立場を異にする洪惟仁提唱の表記に依拠する黄勁連の詩集も刊行されているし、台湾意識を前面に出した中国語による作品も発表されている。

鈴木・コウオジェイ両氏は、呉と小嶋という二人の画家を美術史研究においてどのように位置づけていけばいいのか、先行研究がごくかぎられているなかで、方向性を模索しながら真摯に作業を進めている印象を受けた。台湾語詩人としても著名な呂氏の報告は、林氏のコメントにもあったとおり、言語やエスニシティの多元性が称揚される台湾で、台湾語文学が直面してきた／している課題をうかびあがらせていた。報告者が、研究対象にむきあいながら思索をかさね、新鮮な見解を提示していく過程にふれることができた貴重な機会であった。

第 11 分科会

自由論題（政治学・経営学）

清水麗（麗澤大学）

座長：清水麗（麗澤大学）
報告 1：五十嵐隆幸（防衛研究所）
「中国の『デジタル権威主義』に立ち向かう台湾――『デジタル民主主義』モデルケースの創造――」
報告 2：川上桃子（アジア経済研究所）
「台湾の企業経営にみる女性の不在・偏在の産業史的考察――半導体産業と金融業の比較――」
コメンテーター：松本充豊（京都女子大学）、赤羽淳（中央大学）

第一報告では、五十嵐隆幸会員からデジタル権威主義とデジタル民主主義の対抗軸によって中台関係の対立構造を分析する報告がなされた。中国は、最先端のデジタル技術を活用して国民生活を効率よく監視し、全方位で閉鎖的なデジタル空間を構築することにより政治的安定と体制の維持を図るデジタル権威主義である。一方、台湾は、デジタル技術を活用することにより、市民と国家との対話と協力を促進するデジタル民主主義を標榜する。新しいテクノロジーの活用により体制の安定と維持を図る中国は、体制の相違が即対立につながるのではなく、むしろそれを対抗軸に使っている。しかし、中国式の統治であるデジタル権威主義は、国際政治のレベルにおいて多くの発展途上国のモデルとなり、インターネット空間を通じて相対する国家に影響力を行使する、と指摘された。一方、参加型民主主義の構築を目指す台湾は、中国のこうしたシャープパワーや影響力工作に対し、自由で公正な選挙を保つために国内外の影響を排除することやファクト・チェックの強化など部分的に対処し、それ以上の反撃攻勢は行っていないと分析された。

コメンテーターの松本充豊会員は、挑戦的なモデル化への試みであることを評価しつつ、①権威主義の多様性を踏まえる必要、②異なる政治体制の対立がお互いを「脅かす」要因の限定の必要性などが指摘された。そして、この対立構図が、馬英九政権から蔡英文政権、そして次期政権へと続く現在進行形であることの重要性と難しさが提起された。さらに参加者からは、YouTube などを通じたディスインフォメーションへの対応について調査する困難や中国によるディスインフォメーションの事例が台湾国内で自陣営の弁護や相手陣営への攻撃材料として政治性を帯びていることなど、調査と分析の難しさが指摘された。

第二報告で川上桃子会員は、まずジェンダーギャップの比較的小さい台湾社会のなかで、半導体産業のように特に女性の役員が少ないハイテク産業がある一方、エレクトロニクス分野の営業職や銀行など金融業の役員に女性の偏在がみられると指摘し、その原因を産業史の特徴と結びつけて説明した。今回の分析の対象を大企業に限定したうえで、キャリア形成は高度にジェンダー化されているが、異なる産業に属する企業では、企業内で働くジェンダー力学に発展パターンなど産業固有の特徴が刻印され、異なる状況を生み出していることを明らかにした。

コメンテーターの赤羽淳会員は、発展プロセスの各段階で産業によって排除の度合いが異なる点を提示し、ジェンダー（化）を説明変数と被説明変数のどちらとするかを明確にすることで、議論がより整理される可能性を示唆した。さらに、女性の「排除」という強い表現の妥当性を検討する必要性とともに、経営、中間の階層比較や独自アンケートの実施による研究の発展の可能性があると評価した。参加者からは、欧米の組織論を適用して考える問題点や女性が財布のひもを握る現象の日台の相違、日韓が特異事例であるとの観点、政治分野におけるジェンダー状況の調査への応用など、多くの提起がなされた。

いずれの報告も、新たな視点から実証的な分析を行う試みとして注目される一方、討論を通じ、既存のデータでは分析が十分に行えない点やデータ解析の精密化をいかに進めるかなどの課題も明確となった。両報告をきっかけとして、政治学および経営学領域で、新しい視点からの議論が引き続き展開されるであろうと期待される分科会となった。

受賞のことば

第１回日本台湾学会学術賞　受賞の言葉

鈴木賢（明治大学）

2017 年 5 月 24 日に大法官第 748 号解釈が示され、同性間に婚姻を成立させていない民法を違憲とする判断が出された。これで台湾では２年以内に婚姻平権（同性間の婚姻権の保障）が達成されることが確実となった。このころから、そこに至る歴史過程を整理し、何がアジアで初の同性婚法を可能としたのか、そのメカニズムを解き明かしてみたいと思うようになった。
2019 年 5 月から同性婚法が施行されて間もなく、図らずもパンデミックが世界を襲った。2020 年度の授業はすべてオンラインになり、種々の活動がことごとくストップしたおかげで、時間に余裕が生じた。こうして集中して執筆することが可能となり、一気に書き下ろすことができた。本書は私にとっては 2 冊目の書き下ろしの、単著にして、台湾法研究としては最初のまとまった成果となった。

一般に法規範の変容、生成は、社会のなかで政治的、文化的プロセスをくぐり抜けて生じるものであり、その根源的な探求は必然的に discipline を超えた（いわゆる跨学科）な性格を帯びることになる。法の論理だけで法は生成しないのである。それゆえ、本書は同性婚法を誕生させた台湾という政治共同体に生起した営みの全体を視野に入れた、まさに地域研究そのものとしての性格をもつ。過日、法学の世界では第 35 回尾中郁夫家族法学術賞（14 年ぶりの該当作）という栄誉をいただいた。日本でも同性婚に社会的な関心が集まるなか、隣国、台湾での経験に関心が寄せられた結果であろう。そして当学会からは創設されたばかりの第１回日本台湾学会学術賞を授与され、台湾研究の世界でも高い評価をいただくことができた。この場を借りて、審査に当たられた委員の先生たちに深く感謝申し上げたい。

本書は台湾という地に展開したセクシュアリティ（台湾華語でいう性別）と法をめぐる政治過程、言説の交錯史を、網羅的にたどり、何が法制定という結果に導き、また同性婚の承認がこの社会に何をもたらしたかを分析したものである。本書では必ずしも自覚的に書けていないが、本書の出版後、結局、この本で考えていたことは、以下３点に集約できることに気がついた。

第１に、華人を構成員の主体とするこの国で、同性間にも婚姻を成立させる法ができたことは、異性愛（男女の結合）だけを自明とし、すべての人間が子を残すことを、人生で必ず果たすべき任務と見做すという「伝宗接代」の呪縛からの脱却を意味する。それは脱儒教文化であり、まさに脱中国化に他ならない。台湾の同志 LGBTQ の人権運動が、台湾アイデンティティや台湾ナショナリズムの高揚と結合する傾向（＝同志国族主義）があったのは、そうした背景がある。

第２に、民主化の達成、そしてその成熟により、政権交代が定期的に生じうることが、課題解決に向けた「日程」を政治に組み込んだということである。同性婚というテーマは、ほぼどこの国でも激しい意見の対立が生じる。社会の亀裂はきわめて深く、コンセンサスを形成するのは困難を極める。台湾もまったく例外ではなかった。しかし、台湾がアジアで最初にこれに答えを出せたのは、台湾の民主主義が成熟し、政権交代を繰り返すようになっていたことが、大きく作用している。蔡英文を総統とする民進党政権の誕生、そして大法官の任命、立法院での過半数の議席確保、これがそろったからこそ、同性婚は実現した。同性婚法採択後には、残されていた異性婚との差異も、早々と解消することに成功している。すなわち、外国籍の同性

パートナーとの婚姻の制限撤廃（2023 年 1 月、内政部通達）、同性婚カップルによる第三者の子との共同養子縁組への民法の準用を認める法改正（同年５月）がなされた。これも 2024 年 1 月に迫る総統、立法委員選挙（＝政権交代の可能性）が、現政権に答えを出すよう迫った結果なのである。

第３に、台湾という政治共同体が、特定のイデオロギーや価値へのコミットメントによって成り立っているということである。具体的には個人の自由や人権、多様性や自己決定の尊重といったイデオロギーである。呉叡人（中央研究院）の言葉を借りれば、台湾とは、共通の習俗的本質ではなく、共通の歴史的経験とこれに根ざした理念により結合するネーションであるということである。呉叡人は、「台湾とはひとつのシビック・ネーション civic nation」であると喝破している（自主講座「認識台湾」シンポジウム「台湾と沖縄　黒潮により連結される島々の自己決定権」、2023 年７月８日、京都大学）。本書が取り上げた婚姻平権をめぐるプロセスは、まさにこのことを実証している。この理念は若年層、高学歴層を中心に、相当程度、社会に深く浸透している。

台湾の多くの人々、特に若者たちは、台湾がアジアで初めて同性婚を法認した国になったことに誇りを感じている。この過程を世界ではじめて包括的に整理、分析した本書に高い学術的な評価をいただけたことは、台湾人にとっても名誉なことであると思いたい。近く本書の華語版も台湾で出版されることになっている。より多くの人に読まれることを切に期待している。

第 23 回日本台湾学会賞受賞（文化文学言語分野）

生きる場所のための法

周頡（東京大学・院生）

この度は日本台湾学会賞（文化文学言語分野）に選出いただき、誠にありがとうございました。貴重なご意見をいただいた査読者と編集委員会の皆様、および学会賞の選出に関わった選考委員会の皆様に心よりお礼申し上げます。

本論文では、台湾原住民 Talum Suqluman の狩猟事案に関する憲法解釈に焦点を当て、近代的法体系と原住民の在来的知識体系との葛藤や矛盾、そしてその間に生じる法と在来知の相互変容の可能性を探求した。結論の中で、「原住民の在来的法体系を真摯に受け止め、既存の法体系の枠内に内発的な修正を促進させるかどうか、これから続けて検討していく必要がある」と書いたが、それから今日この「生きる場所のための法」を書いた時点までに、台湾原住民に関連する二つの極めて重要な法的判決が下された。

1 つ目は、昨年の 10 月末、憲法裁判所に相当する台湾の司法院大法官会議が『原住民身分法』の中で、原住民の身分判定に関わる一部条例が違憲であると判断したことである。この判決によって、長い間看過されてきた平埔族の人々はようやく台湾原住民として承認されるようになった。2 つ目は、ごく最近の 5 月末に、鉱業法改正案が可決されたことである。この改正案によって、1990 年代から行われていた「還我土地」という民族運動が主張する環境問題だけでなく、原住民の土地所有権も保障されることになった。これによって、台湾原住民と彼ら／彼女らの生きる場所である土地との関係性が法的に保護されるようになるだろう。要するに、拙稿で取り上げた狩猟事案の解釈を含むこれらの判決からわかるのは、台湾の法体系が決して不変不易のものではなく、原住民の反発と訴求に応じて修正され、原住民の権利回復を促進して

いるということである。この場を借りて、筆者は法律が誰／何のためのものなのかについてもう少し深く掘り下げたい。

日常生活において、私たちは法律に言及する際に、何を思い出すのか。厚い法典、難解な条文、終わらない裁判の過程、ややこしい名詞解釈というイメージがよく浮かび上がるかもしれない。この場合、法律は主に静態的な法テクストとして人々に認識され、絶対性、不変性、または重層性、精密性を持つ法体系こそが、すべての事柄を包摂し、権威性と公平性を維持できるものと見なされている。しかし、こうした一枚岩の法的表象の背後には、法体系に巻き込まれる権力者の意志と動機、被支配者の反発と感情などのさまざまな要素が見過ごされる。したがって、拙稿の関心は、法テクスト自体よりもむしろ、法テクストに対する異なる認識、解釈、または操作――例えば、裁判所の質疑応答の流れ、各大法官による異なる解釈、法体系と在来知の矛盾を調和させるための提案――といった法の動態的なプロセスにある。もちろん、最終判断は大法官によるもので、法律が権力者の支配用の道具にすぎないという反論が出てくるだろう。その側面は否定できないものの、法律は権力関係や法体系自体のためではなく、人々が生きる場所を求めるために作られるものであると筆者は主張したい。ややロマンチックな表現かもしれないが、法律の変容可能性は、テクストや文書に由来するものではなく、より良い生きる場所を求める人々が、自らの未来を法律に賭けること、といった人々の勇気と行動にあると考えられる。このように、法律は固定的な、静態的なものではない。そのため、私たちがやらなければならないのは、法律の可変性を意識しながら、自分が望む生きる場所に向けて絶え間のない法的変容を積極的に求めることである。

最後に、今回の受賞を励みに、台湾原住民に関する研究領域において考察の広がりと研究の深化ができるよう、より一層の精進をしていきたいと思います。

学会・シンポジウム等参加記

SOAS
第 20 回欧州台湾学会（EATS）参加記

前原志保（九州大学）

2023 年 6 月 26 日から 28 日の４日間、英国・ロンドン大学東洋アフリカ研究所（SOAS）にて欧州台湾学会（European Association of Taiwan Studies: EATS）第 20 回記念大会が開催された。日本からは、私と佐々木孝子会員が参加した。従来、欧州台湾学会は４月の第二週に開催されることが多く、2019 年に私が初めてこの学会に参加した時も４月 10 日から 12 日に行われた。しかし今回は北米台湾研究学会(North America Taiwan Studies Association：NATSA）の大会(2023 年６月 22 日-24 日)とほぼ同時期に行われた。欧州台湾研究学会は欧州の大学で教員をしている研究者が中心となって、北米台湾研究学会はアメリカで博士課程に在籍している台湾人留学生が中心となって運営されているため、厳密に言えば参加している人々の属性は異なるのかもしれないが、たぶん今回の六月開催は大会直後の 28 日午後から 30 日まで行われた台湾スタディーズサマースクールで登壇する研究者に配慮した設定だったのかもしれない。（次回の第 21 回大会は、オーストリアのウイーン大学で 2024 年４月３日から５日まで予定されている。）

今回の第20回大会は大会のメインテーマとして「20年間の台湾研究：回顧と展望（Taiwan Studies in Twenty Years: Retrospect, Prospect)」を掲げており、この20年間のヨーロッパにおける台湾研究の成果をあたらめて見直すプログラム構成だったように思う。二日半のプログラムの中で、基調講演が２つ、パネルが20あった。そのうち台湾民主基金会のパネルが一つ、修士課程在籍の学生によるMAパネルが２つ、現在修士課程または博士課程に在籍している者、あるいは博士論文を提出してから３年以内の者で、現在専任講師ではない者を対象とした台湾若手奨励賞（The Taiwan Studies Young Scholar Award (YSA)）の順位を決めるパネルが一つあった。私もMAパネルの一つに参加をしたが、それは前日に行われた私自身の発表の際にMAパネルで発表する学生が私を訪ねてきて是非見にきてアドバイスが欲しいと声をかけてくれたからである。奨励賞もそうだが、若手研究者を学会全体で育てていこうという雰囲気を終始感じ取ることができた。また大会１日目にはここ一年間に出版された台湾関連の本を紹介する時間があり、ランチを食べながら作者から直接本の内容について話を聞くことができた。残りの16のパネルの内容も以下のようにテーマが細かく分類され多岐にわたっている。

(1) History and Memory
(2) Activism and Civil Society
(3) Environment and Sustainability
(4) Indigeneity
(5) Fiction, Poetry and Historical Writings
(6) Literary Studies and Translations
(7) LGBTQ＋and Representations
(8) Governance
(9) Diplomacy
(10)Anthropology and Society
(11)Art, Media and Creative Industries
(12)Political Identities and Democracy
(13)Migration, Refugee and Diaspora
(14)Politics, Laws and Election
(15)Film and Visual Culture
(16)Geopolitics and Economy

論文発表者も開催地英国以外の欧州各地（フランス、イタリア、チェコスロバキア、オーストリア、ドイツ、スイスなど）の他に台湾、米国、カナダ、香港、またタイやマレーシアなど東南アジアの国々からの研究者の参加もあった。台湾教育部が世界各地の大学に台湾研究講座を設置していることは自分が九大の台湾スタディーズを運営していることもあり承知していたが、今回の大会で非英語圏以外の台湾講座がどのような取り組みを行なっているのか知る機会が多くあり大変勉強になった。私が英国の修士課程に在籍していた2002年頃、英国で台湾を研究するのはとても難しかった。「中国研究」と「台湾研究」の違いがぼんやりとした状態だったし、大学院の卒業パーティーの学科長の挨拶では「極東アジアを研究する奇特な皆さん」などと冗談のような声かけがされた。SOASはそのような状況下でも年に数回台湾関連の研究会を開催しイギリスにいる台湾研究を行う研究者にとってとても貴重な場所であった。そこから約20年という年月を経てこれだけ大きな台湾研究のネットワークが欧州で構築されているのはとても感慨深い。SOASの台湾スタディーズをはじめとした欧州各地の研究者の努力と結束力の賜物なのだと感じた。

シリーズ地域研究のすすめ

ようこそ中華世界へ【新刊】

川島真 編　中国との関係は多くの分野で深化しているが、その「中国」とは台湾・香港・マカオ・華人を含めた多様な中華世界だろう。政治から文化に至る多方面の専門家が、中華世界を解説する。　2970円

中国の外交戦略と世界秩序

——理念・政策・現地の視線

川島真・遠藤貢・高原明生・松田康博 編　習近平率いる現代中国は自らの対外政策をいかに説明しているか。また現地社会からどう見られているか。双方向的に考察する。　3850円

東アジアで学ぶ文化人類学

上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大 編　中国、台湾、韓国そして日本など東アジアでフィールドワークを行う研究者達が現地で出会った事例をもとに文化人類学の主要テーマを解説する。　2420円

テロワール【新刊】

——ワインと茶をめぐる歴史・空間・流通

赤松加寿江・中川理 編　4180円

タバコ産業の政治経済学

——世界的展開と中国の現状

丸川知雄・李海訓・徐一睿・河野正 著　4290円

ビーズでたどるホモ・サピエンス史

——美の起源に迫る

池谷和信 編　3080円

外国人移住者と「地方的世界」

——東アジアにみる国際結婚の構造と機能

藤井勝・平井晶子 編　6380円

石干見の文化誌

——遺産化する伝統漁法

田和正孝 著　5280円

〒607-8494　京都市山科区日ノ岡堤谷町 3-1
TEL 075-502-7500　FAX 075-502-7501

図書出版 昭和堂

〈価格 10% 税込〉
http://www.showado-kyoto.jp

日清戦争の研究　全3巻

■[編]檜山幸夫　日清戦争を多角的な観点から照射。その全体像を描く著者永年の研究の集大成。第一章 総論（日清戦争の歴史的位置／日本人と戦争／「日本人」意識の形成ほか）第二章 朝鮮出兵と日朝開戦（伊藤内閣と朝鮮出兵政策／第一次朝鮮出兵事件／京城事件と日朝戦争ほか）第三章 日清開戦（明治天皇と日清開戦ほか）　●各9、350円

コレクション・台湾のモダニズム　第I期 全20巻

■[監修]和田博文／河野龍也／呉佩珍／冨田 哲／横路啓子／和田桂子
日台双方の膨大な一次資料から重要文献を厳選。モダニズム資料の決定版。第一回・全4巻＝①台湾総督府の植民地統治（呉叡人編）②日本・南支・南洋への航路（和田博文編）③台湾縦貫鉄道と交通網（蔡龍保編）④モダン都市景観（李文茹編）　●各19、800円

記号化される日本

——台湾における哈日現象の系譜と現在——

■[著]張瑋容　台湾における「日本オタク」を理論的に分析し、インタビューやフィールドワークと理論的分析を重ねながら、その多様な対日感情構造を解読。「哈日現象の最中に中学生になった」社会学者による、台湾における〈日本〉の記号学的分析。　●8、800円

近代台湾都市案内集成

■[監修・解説]栗原純／鍾淑敏……全20巻●揃363、000円
様々な視点で台湾を紹介した一八九七年～一九四二年の文献を収録。
●第一回配本：『台湾鉄道旅行案内』シリーズ 全6巻・揃 90、200円
●第二回配本：台湾全般の案内記 全6巻・揃118、800円
●第三回配本：台湾各地域・都市の案内記 全8巻・揃154、000円

ゆまに書房　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6　http://www.yumani.co.jp/
TEL.03(5296)0491　FAX.03(5296)0493　※税込・パンフレット進呈

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

第 157 回日本台湾学会定例研究会活動内容
日時：2023 年２月６日（月）15:30～17:00
会場：東京大学駒場キャンパス　18 号館コラボレーションルーム 1
報告者：林孝庭（スタンフォード大学フーバー研究所）
テーマ：「李登輝與台灣務實外交再思考」
司会：川島真（東京大学）
使用言語：中国語（通訳なし）
共催：東アジア国際関係史研究会との共催
参加人数：30 名

報告者は、スタンフォード大学フーバー研究所アーカイブ所蔵の唐飛文書や、イギリス、アメリカなどの新たに公開された外交文書などを使用し、1980 年代以来の李登輝による「実務外交」を再検討しようとした。蔣経国政権期に李登輝が副総統であった時代からその外交の起源は存在していたが、1988 年に蔣経国の死に伴って総統に就任し、翌年に天安門事件が発生するとその外交空間は一気に広がった。

従来の理解では、1990 年代初頭に台湾に APEC 加盟などの機会は訪れたものの、韓国との断交、またシンガポール、ブルネイなどの中華人民共和国との国交締結などがあり、台湾が国際環境を有利に利用して積極的な外交を展開していたとの理解は必ずしも共有されていなかった。

それに対し、報告者は主にイギリス、アメリカの史料などを用いて、台湾がとりわけ欧米諸国との「外交」を積極的に展開し、欧州諸国の閣僚の台湾訪問なども見られていたこと、また台湾はこの機会を得て、分断国家がともに国連に加盟する方式を利用して国連再加盟を遂行しようとしていたことを明らかにした。

しかしながら、1996 年 3 月の総統選挙で李登輝が（民選）総統に選出された後になると、むしろ第三次台湾海峡危機を踏まえて米中間で台湾海峡を「管理」する枠組みが改めて形成されたために、李登輝政権の対外政策は強く抑制されることになったとする。李登輝が総統であった 1988 年から 2000 年において、1996 年からの４年間が最も困難な時期であったという。報告では、このほかにも多くの事実やエピソードが披瀝され、聴衆を大いに啓発した。

これに対してフロアからは、上記のような既存の理解との整合性をいかに見るのか、天安門事件後の中華人民共和国への先進国からの制裁が台湾にもたらした「恩恵」だったのではないか、この李登輝の積極的な外交において日本はいかに位置付けられていたのか、李登輝政権内部の政策担当者、政策決定過程はどのようになっていたのか、ということなど、数多くの疑問、コメントが寄せられた。ここでは報告者の回答を記さないが、丁寧かつインフォーマティブな回答がなされ、活発な議論が行われた。日本の外務省記録もすでに 1990 年代初頭まで公開

されていることから、日本側の史料も含めた李登輝政権の「実務外交」を再検討することが求められるであろう。（記録：川島真）

第 158 回定例研究会活動内容
2023 年 3 月 6 日（月）17：30～19：00
会場： 東京大学東洋文化研究所 3 階大会議室およびオンライン
共催： 東京大学東洋文化研究所、早稲田大学台湾研究所
報告者：任天豪（国防大学一般教養教育センター・准教授）
テーマ：「国家にとって『島嶼』が持つ意義――台湾の史料からみた東シナ海と南シナ海（「島嶼」對於一個國家而言――臺灣史料裡的東海與南海）」
司会： 黄偉修（東京大学東洋文化研究所／早稲田大学台湾研究所）
参加者：35 名

任天豪氏は、中華民国という政権が冷戦期に何を感じ、何をして、その後の冷戦の展開にどのような影響を与えたか、そして我々の冷戦に対する認識に影響があるのか、という問題関心のもと、中華民国は東シナ海と南シナ海の島嶼に対しては、実質的な認識のレベルよりも宣伝的な性質が大きいという論点を展開した。

その背景には、中華民国の「大陸国家」への回帰という強烈な意志があったため、海洋に対する野望は相対的に衰退した点が挙げられた。また、アメリカのパワーが直接及んでいて、中華民国が「関心を寄せることのできない場所」（琉球ないし東シナ海）に対して、中華民国は自ら譲歩を選択した。一方、南シナ海に対しては、中華民国は東シナ海よりも相対的に領土意識を強調してきたが、有効的な掌握には至らなかった。

また、コメンテーターの松田康博氏からのコメントに対し、任天豪氏は、中華民国政府の島嶼に対する領土意識が比較的低いのは、程度こそわからないが、アイデンティティとも関連があり、また島嶼の問題については当時の政策上の必要性に基づいて判断されているという考えを示した。さらに、土地の利用状況などの調査に関するフロアからの質問に対して報告者は中華民国は実際に統治している地域に対しては調査を行っているが、それ以外の遠い場所については政治的な事件が関わっているかが重要となってくると指摘した。会場とオンラインあわせて約 35 名の参加者があり、活発な議論が展開された。（記録：丁天聖）

第 159 回 日本台湾学会定例研究会活動内容
日時：2023 年 6 月 21 日（土）16:00～17:30
場所：東京大学駒場キャンパス 303 室
報告者：蔡東杰（国立中興大学）・陳育正（台湾国防大学）
司会・ディスカッサント：川島真（東京大学）
題目：「東亜国際局勢和台湾」
参加人数：16 名
共催：東アジア国際関係史研究会

本研究会では、２名の報告者からの報告、ディスカッサントからの問題提起のあと、参加者との間の質疑応答がなされた。

主題は、1）現下の国際秩序、２）米中関係の現在と今後、３）東アジアの国際秩序と両岸関係、４）中国の現在と将来、５）台湾の政治社会の現在と前途であった。

蔡教授は、1950年代以来の両岸関係の歴史的経緯を、米中関係を中心に振り返り、今後のアメリカの台湾海峡への関与について疑問を投げかけた。陳教授は、（所属先と関わりない個人の見解として）中国の軍事力とその活動、そしてその台湾の影響について述べつつ、中国の台湾への軍事力行使についての様々な観点を比較検討した。ディスカッサントからは、台湾海峡を歴史の解釈、また現在の中国の「平和と戦争との間」のグレーゾーンにおける浸透工作などについての見方、アメリカの台湾認識や台湾に対する欧米のアプローチの相違などについて問題提起がなされた。

参加者からも、アメリカとの安全保障条約を「信頼」する日本社会について紹介があり、アメリカの関与に関する認識の日台間の相違や、アメリカとして台湾に関与しなかった場合のリスクなどについて質疑がなされた。「台湾有事」も含め、台湾、台湾海峡に関心が高まっている中で、台湾内部での認識や見解が日本では捨象されがちであることに鑑みれば、この研究会で行われたような議論が重ねられていくことがいっそう必要となろう。（文責：川島真）

定例研究会

台北

担当幹事：田畠真弓（専修大学）、報告：冨田哲（淡江大学）

第90回台北定例研究会

日時:2023年３月18日（土）15:00～
場所:台湾大学台湾文学研究所
報告者:山口守(日本大学文理学部)
テーマ:北京時期の張我軍：政治と文化に挟撃される主体性
使用言語：日本語
参加者数：９名

第91回台北定例研究会

日時:2023年４月22日（土）15:00～
場所:台湾大学台湾文学研究所
報告者：前田直樹（政治大学台湾史研究所）
テーマ：ジョンソン政権と前期佐藤政権の中国政策の交錯
使用言語：日本語
参加者数：13名

以上

airiti Library 【台湾 E-journal コレクション】

台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）2,835 タイトルを精選した E-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A&HCI、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。 https://www.airitilibrary.com/

JUSTICE コンソーシアム採択。ほとんどの大学図書館様は特別割引価格が適用されます。お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】
人文学、社会科学、基礎応用科学、工学、生物農学、医薬衛生学の 6 分野 2,835 タイトル（‘23 年 4 月時点）

【言語別タイトル数：タイトルに複数言語を含むもの有】
繁体字中国語：2,072 誌 / 英語：1,348 誌 /
簡体字中国語：47 誌 / 日本語：25 誌 / ほか

【主な導入機関】
台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学 等）/ トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館 等）
日本：‘20 年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました

iRead eBooks 【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ”が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの 60,000 タイトル以上の eBook コレクションも利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。 https://www.airitibooks.com/

文生書院

日本販売総代理店
〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683 Fax:(03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

オンライン版 New!　総代理店：丸善雄松堂

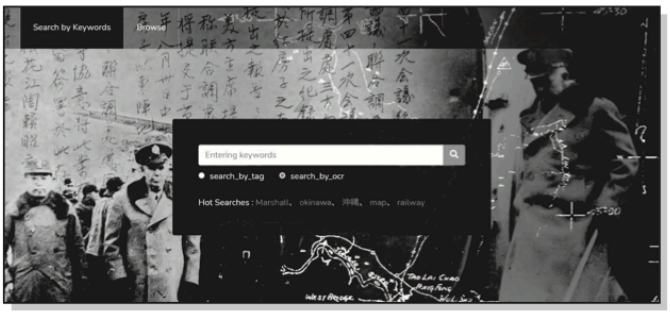
美方調停國共事件紀録簿

NARA所蔵 国共内戦とアメリカ 1945-1947年の記録

漢珍數位圖書(Transmission Books & Microinfo)

1945年12月、トルーマン大統領はジョージ・マーシャルを中国に派遣。中国共産党と国民党の軍事衝突を回避すべく調停を試みたアメリカ側の資料は20万ページを超え、NARAに保管されてきました。本データベースは、研究者や専門家に待ち望まれていたデジタル化企画であり、現在の情勢にもつながる貴重な学術資料です。

資料の言語：英語 中国語
収録資料の種類：報告書、手紙、地図 など



購入型、年間購読型がございます。価格などの詳細はお問い合わせください。

Ⓜ MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部
〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6160 e-mail: e-support@maruzen.co.jp

学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

【第 13 期理事会第 1 回会議議事録】（抄）

日時:2023 年 5 月 26 日(金)16:15-17:15
場所:名古屋市立大学 1 号館 515 室 ＋Zoom オンライン会議

出席:〔理事〕赤松美和子、明田川聡士、家永真幸、五十嵐隆幸、植野弘子、大東和重、 小笠原欣幸、何義麟、川上桃子、川島真、北波道子、洪郁如、佐藤幸人、清水麗、 菅野敦志、垂水千恵、冨田哲、松金公正、松本充豊、三澤真美恵、宮岡真央子、山﨑直也、林初梅、〔名誉理事長〕下村作次郎、春山明哲
欠席:〔理事〕上水流久彦、黄英哲、駒込武、福田円、星名宏修、やまだあつし、〔名誉理事長〕若林正丈、山口守
主宰:松田康博第 12 期理事長および第 13 期理事長
書記:清水美里

議題
1. 第 13 期理事選挙の結果について(田中雄大選挙管理委員長、川上第 12 期総務担当理事による代理報告)
第 13 期の理事選挙結果につき報告された。2023 年２月 15 日に東京大学で開票作業が行われ、投票総数 88(有効 86、無効２)があり、得票の多い順に 30 名が理事に選出された。

2. 理事長の選出について(松田第 12 期理事長)
松田第 12 期理事長より北波道子理事に第 13 期理事長の推薦があった。拍手で承認された。

3. 第 13 期業務執行体制について(北波第 13 期理事長)
北波理事長より、下記の第 13 期業務執行体制案が示された。満場異議なく原案が承認された。

日本台湾学会第 13 期運営組織(敬称略)
理事長：北波道子
副理事長：松金公正
理事(30 名)：赤松美和子，明田川聡士，家永真幸，五十嵐隆幸，植野弘子，大東和重， 小笠原欣幸，何義麟，上水流久彦，川上桃子，川島真，北波道子，洪郁如，黄英哲，駒込 武，佐藤幸人，清水麗，菅野敦志，垂水千恵，冨田哲，福田円，星名宏修，松金公正，松 田康博，松本充豊，三澤真美恵，宮岡真央子，山﨑直也，やまだあつし，林初梅
常任理事(12 名）：赤松美和子，明田川聡士，五十嵐隆幸、上水流久彦，洪郁如，清水麗，菅野敦志，冨田哲，松金公正，松田康博，宮岡真央子，山﨑直也
幹事(８名）：五十嵐真子，清水美里，田畠真弓，沼崎一郎，堀内義隆，松岡格，松葉隼，八木はるな
総務：五十嵐隆幸
総務補佐：明田川聡士

会計財務：山﨑直也
学会報編集委員(7 名）：赤松美和子(委員長)，上水流久彦(副委員長)，田上智宜，張文菁，中原裕美子，深串徹，松田ヒロ子，長谷川健治(アドバイザー)
企画委員(7 名）：冨田哲(委員長)，堀内義隆(副委員長)，清水麗，角南聡一郎，唐顥芸，豊田周子，藤野陽平
広報：宮岡真央子，松葉隼(ホームページ担当)，八木はるな(ニュースレター担当)
定例研究会：松岡格，五十嵐真子(関西)，田畠真弓(台北)
国際交流：洪郁如，菅野敦志
学会賞担当：三澤真美恵
対外発信強化プロジェクト：沼崎一郎(委員長)、垂水千恵、菅野敦志
理事会書記 清水美里
第 26 回大会実行委員長：清水麗
学会賞：松本充豊(委員長)
学術賞・特別賞：三尾裕子(委員長)
会計監査：張文菁(2023 年度まで)，根岸忠(2024 年度まで)
選挙管理委員：未定
事務局：川上桃子(事務局担当理事)，鶴岡宏美

4. 会計監査の推薦について(北波第 13 期理事長)
北波理事長より、今期の会計監査につき、張文菁会員(2023 年度まで)、根岸忠会員（2024 年度まで)が候補として推薦され、総会への推薦者とすることが満場異議なく承認された。

5. 第 25 回学術大会予算(案)について(山﨑第 12 期会計財務担当理事）山﨑理事より、配布資料のとおり学術大会予算案が示され、審議が求められた。第 25 回学術大会予算案は、満場異議なく承認された。

6. 2023 年度予算(案)について(山﨑第 12 期会計財務担当理事）山﨑理事より、配布資料のとおり 2023 年度予算案が示され、審議が求められた。同予算案は満場一致で承認された。

7. 第 26 回学術大会開催校について(松田第 12 期理事長)
松田第 12 期理事長より、第 26 回大会は千葉県柏市・麗澤大学にて、2024 年 5 月 25・26 日に開催され、清水麗会員が第 26 回学術大会実行委員長に就任することが報告された。

8. その他 特になし。

以上

【第 13 期第 1 回会員総会 議事録】

日時 :2023 年 5 月 27 日 16:50-17:40
場所 :名古屋市立大学滝子(山の畑)キャンパス２号館２階 207 教室 +Cisco Webex

報告
1.第 13 期理事選挙結果について(選挙管理委員会)

田中雄大選挙管理委員長から、第13期理事選挙の結果について報告がなされた。第13期理事選挙の開票が2023年２月15日に東京大学本郷キャンパス人文社会学系研究科内において立会人のもと厳正に実施され、30名の当選を確認したこと、当選者の氏名はすでに学会ウェブサイトに掲載されている旨が報告された。

2.第13期理事長選出について(松田第12期理事長)
松田理事長より、第13期第１回理事会の結果、北波道子会員が理事長として選出されたことが報告された。

3.第13期理事長あいさつ
北波理事長より松田前理事長に対し謝辞が述べられた後、次のような所信表明があった。「これまでの学会運営方針に基づき、次代へ安定的に引き継ぎ、堅実な学会運営を目指す」。また、第13期の常任理事等について北波理事長より報告された。

4.2022年度業務報告
(1)松田理事長
第12期の学会活動の総括が行われた。いわゆる学会三点セット(学術大会、学会報、ニュースレター)の維持に加え、ソーシャルアウトリーチやグローバルアウトリーチの強化、インクルーシブな学会運営や様々な立場にある会員が参加しやすい環境整備に取り組んできた旨、報告があった。また支援をいただいた関係機関への謝意が表明された。

(2)川上総務担当理事
現在の会員数について報告がなされた。2023年５月27日現在の会員数438名(一般会員369名、学生会員52名、シニア会員15名)。過去１年間で入会22名、シニア会員への移行４名、退会10名、自動退会68名であった。

(3)山﨑会計財務担当理事
22年度の会費納入率は一般、学生会員平均で78.28%であったと報告があった。クレジットカードによる会費納入を導入したことも好影響となった。決算としては、366,903円の黒字であった。

(4)松金編集委員長
第24号では、第23回学術大会のシンポジウムにおける基調講演１本、報告４本のほか、投稿された論文８本のうち６本が採用され、また書評９本とエッセイ１本が掲載された。 また、現在、25号を編集中である。今号より投稿規定を設けた。投稿論文等は10本。第24回学術大会シンポジウム原稿のほか、書評９本、研究動向１本、書評へのリプライ１本、 エッセイ１本が掲載される見込みである。このうち研究動向は今回より導入したものであり、書評へのリプライもはじめて掲載される予定である。またJ-stage移行にむけ、原稿執筆要領が、投稿規定・原稿執筆要領となった旨、報告があった。

(5)冨田企画委員長
第25回学術大会には分科会企画３件、自由論題13件の申請があり、全て採用された。台湾文学学会会員からの応募はなかった。

(6)福田広報担当理事
ウェブサイトの更新、メールの配信、 ニュースレターの発行を例年通りに進めた。ウェブサイトに関しては新田会員、ニュースレターについては赤松会員が担当の任期を終える。

(7)菅野・洪国際担当理事
対外発信強化プロジェクトとして、優秀論文の英訳支援と JCEAS(Journal of Contemporary East Asian Studies)への推薦などを行った。

(8)定例研究会担当
○ 関東:松岡理事(代理報告:川上理事)
前回大会以降全６回の定例研究会を開催した。
○ 関西:澤井理事(代理報告:北波理事)
2022 年 12 月 17 日に関西大学梅田キャンパスにて関西部会大会を開催した。12 月 23 日に関西大学梅田キャンパスで関西部会大会を開催する。
○ 台北:田畠幹事(代理報告:川上理事)
過去１年に２回の定例研究会を開催した。

議題
1.2022 年度決算案について(会計監査報告)
○山﨑理事より 2022 年度決算案についての説明が行われた。
・支出の面で会議費・交通費の予算額と決算額に大きな誤差があったのは、遠隔地の常任理事がオンラインで会議に参加し、支出が抑えられたため。
・クレジットカード決済手数料は、 クレジットカードの会費納入が見積もりより多かったため、予算は１万円だったか、実際には３万円を超えた。次年度予算に反映させる。
・クレジットカード決済の導入、適切なタイミングでの呼びかけにより、会費納入が増えた。
○伊藤会員により会計監査報告がなされ、2022 会計年度の決算報告書及び会計資料の監査を行った結果、適正であることが確認されたことが報告された。決算案は、異議なく原案通り承認された。

2.2023 年度予算案について
2023 年度予算案について、会計財務担当の山﨑理事より説明が行われ、異議なく原案通り承認された。

3.日本台湾学会倫理綱領の策定について
川上理事より、日本台湾学会倫理綱領の策定について説明が行われた。策定を進めた主な理由として、昨今、国内外の学術団体で倫理 関連の規定を策定する動きがあり、日本台湾学会でも個別事案等に対応していく際に依拠する規定が必要と認め、倫理綱領の策定に至った旨が説明された。日本台湾学会倫理綱領(案)は、異議なく原案通り承認された。

4.会計監査について
北波理事長より、会計監査の人選について推薦があった。2023 年度まで引き受けていただいている張文菁会員に加え、根岸忠会員が 2024 年度までの２年任期で推薦された。以上の議案について、異議無く承認された。

5.第 26 回学術大会について
第 26 回学術大会については、清水麗会員が実行委員長となり、2024 年 5 月 25 日と 26 日に麗澤大学(千葉県柏市)において開催することが報告された。また清水会員のメッセージを川上理事が代読した。

6.その他
・冨田企画委員長より、来年度大会に向けた呼びかけが行われた。
・赤松編集委員長より、学会報への投稿の呼びかけが行われた。9 月中旬申込、10 月中旬締切
・赤松理事より、7 月 15 日に SNET 台湾が主催し、台湾学会に共催団体となっていただいた九州大学で開催するイベントについて情報共有が行われた。

以上

- 編 集 後 記 *-**-*-*-**-*-*-

・本号は、2023 年 5 月 27 日・28 日に名古屋市立大学で行われた学術大会の様子を、特集「第 25 回学術大会を振り返って」としてお届けいたします。昨年同様にハイフレックス方式でしたが、昨年よりもさらに多くの会員が集合し、活気と熱気にあふれる二日間を過ごしました。また、本号より学会賞・学術賞受賞者に「受賞のことば」を寄せていただくことになりました。今回は、いずれも法律研究者による、法について思考を促す文章で、深く考えさせられました。
・次号 46 号（2024 年４月発行予定）は、特集「初めて台湾／日本へ行ったとき」をお届けする予定です。みなさんの台湾／日本の原風景、最初に感じた空気や息吹など、後の研究関心につながるものでも、そうでないものでも、何でも大歓迎です。会員の皆様のエッセイの投稿を心よりお待ち申し上げます。関心のある方は担当の八木までメールでご連絡ください。
・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

（八木はるな）

*-**-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-**-*-*-*-*-*-*-*-*-*-**-*-*-**-*-*-*

日本台湾学会ニュースレター 第 45 号

発　　行：日本台湾学会（代表　北波道子）
発行年月：2023 年 10 月

■日本台湾学会事務局
〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所気付
E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com
■ニュースレター発行事務局
〒112 -8551　東京都文京区春日 1-13-27
中央大学理工学部 八木研究室気付
E-mail: harunayg@gmail.com